



## 馬耳東風

今や推理小説は時代の文学として多くの読者を引きつけ、テレビによる映像化も盛んである。作家の松本清張は犯罪の背後にある社会の暗部に注目する社会派推理小説、あるいは昭和史や古代史の謎にも挑んだ規範を超えた作家として有名で、文学史上初めての多様にして明確な個性を有する作家といわれている。「点と線」や「眼の壁」は重ねて読んだものだ。清張の文学活動は「或る『小倉日記』伝」にはじまり「画像・森鷗外」で終わっている。小説の内容は時代を反映した思想を取り込み、変貌を遂げてゆく。人間存在の根本を見据え、普遍的テーマによって人間を描き、歴史や社会の闇に迫ろうとしている。大衆の嗜好に左右されることなく、醒めた開明性で創造の世界に挑戦した文学活動の変革者であり継承者として評価されているという。昨年は生誕百年にあたり、講演会をはじめさまざまな取り組みがあちこちで行われた。旅行会社は小説に登場し、描かれた場所を訪ねる旅を商品化し注目された。戦後のメディアの発展の時期と重なり、戦前を引きずりながらの戦後の暗い時代背景は読者の心を揺さぶり、悲しい顛末から推理して謎を解いてゆく。目が離せない展開に、読者は吸い込まれるように読み進んでゆく。

清張は従来の探偵小説乃至推理小説が文学に縁遠いのは、人間心理を無視し人間を描いていないという。推理小説はもっと生活を書き込まねばならない。犯罪はどう

して行われたのかを書くとともに、何故行われたかも同じ比重で書くべきである。犯人の動機は、われわれの奥に持っている心理から牽き出して貰いたい。われわれの日常生活には心理的な危機が満ちている。この部分を載り取って拡大して見せることも、これからの推理小説の行く道の一つの方向であろうと述べている。いまや書店には溢れるほどのミステリーやサスペンス物が並べられている。新しい作家もぞくぞくと登場し、殺人そのものを堂々と表題に書き表しているものも多くを見かけるようになった。手にとると実にリアルで分かりやすく親しみやすい。ミステリーは、怪奇・幻想を含む広い意味での推理小説であるし、サスペンスはスピード・スリルとともに、危機的な場面に読者が覚えるはらはらする感情を煽る。探偵小説が推理小説に名前を変えて久しいが、犯人を追い詰める探偵ものの文学への昇華は、当然ながら人生の何か書かれていることが求められるはずだ。小説の映像化はテレビの視聴率と大きく連動する。殺人を実にリアルに放映する番組も多い。時代劇はもとより、銃や残忍な道具によるものは当然ながら、薬物や爆薬による陰湿なものは眼を覆いたくもなる。

最近家庭がらみの事件が多く見受けられ、日本人の持つ家族思いの良き風土が何処かへ行ってしまったようだ。小説で殺人を美化する描き方は許されないし、リアルな殺人の映像化にあたっては日本人らしい倫理観に立った気遣いが欲しい。

(柏)